

◇ 単元指導計画の工夫

児童・生徒が見通しをもちながら毎時間の活動に取り組むことができるようにするためには、児童・生徒の実態を十分に把握し、見通しをもちやすい活動期間の設定や単元の構成を工夫し、単元にどのように取り組むかという単元展開を考慮することが大切です。

1 ねらいに応じた単元の構成

研究指定校の実践からは、次のような単元の構成の工夫が見られました。このように児童・生徒のねらいに応じて、様々な構成が工夫できます。

①全員で同じ活動に取り組む単元

例えば、小学部低学年で行った「みんなでどうぶつハンターになろう」という単元では、サーキット運動に**全員で取り組む**ことを中心的な活動としました。この単元では、友達と一緒に活動しながら、相手を意識できるようになることをねらいとし、全員で取り組むための個々の児童に応じた教材や分かりやすいルールづくりを工夫しました。

②グループごとの役割をもち、各グループの活動が並列に展開する単元

中学部2年の「わくわくランドを開こう」では、学年の生徒が電車コーナー、ケーキ屋、ミュージックハウス、つり屋に分かれて、それぞれのコーナーの準備を行いました。

それぞれのグループの活動は並行に展開し、当日もそれぞれのコーナーを運営しました。この単元では、大きな集団で活動することのよさと、比較的小集団のグループごとの活動により、友達との役割分担や、友達とともに目標に向かって取り組むことをねらいとしました。

③役割を分担し、集団として一つの活動をつくり上げていく単元

「喫茶店を開こう」（平成25年度東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画に基づく都立特別支援学校の指導内容充実事業報告書P8～11）では、生徒が注文係、会計係、調理係に分かれ、それぞれが役割をもって準備や練習を重ねていきました。そして、「喫茶店の開店」として、これまで係ごとに取り組んだ準備や練習の成果を持ち寄り、それぞれの力を集結させる単元構成としました。この単元では、全体の活動と自分の役割との関係を理解し、責任をもって役割を果たすことをねらいとしました。

「準備」と「片付け」のある活動

生活単元学習では、「児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりする」ために、実際の生活から発展し、児童・生徒の自然な生活としてのまとまりのある活動を通して学習します。「実際の生活」から発展し、「自然な生活としてのまとまり」のある活動を経験するためには、単元や授業の中心的な活動だけでなく、その「準備」や「活動」も児童・生徒自身の活動として扱うことが重要です。

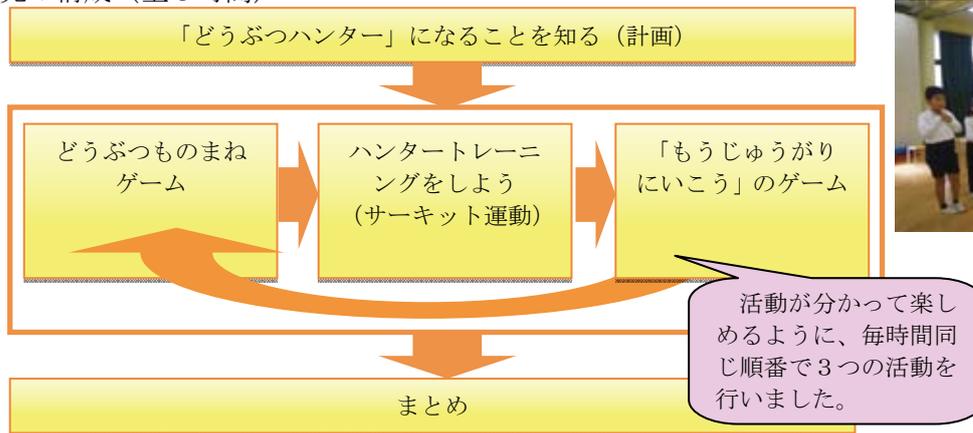
ものづくりや発表を中心的な活動とする単元では、材料の準備や発表内容の選定、活動場所の調整等も、実態を考慮しながら児童・生徒自身ができるような環境や手だてを工夫します。また、1時間ごとの授業の中でも、児童・生徒自身が、自分たちでできる準備を行い、活動の終了後は自分たちで片付けを行うことで、「まとまりのある活動」を経験することができます。

実践例1 みんなでどうぶつハンターになろう（小学部3年生）

「どうぶつハンターになり、いろいろなどうぶつをつかまえる」ことをテーマに、サーキット運動やゲームを行った単元です。目的やきまりのある遊びに繰り返し取り組むことで見通しがもて、タイミングを合わせて一緒に活動するなど、友達を意識する様子が見られるようになりました。



単元の構成（全8時間）



実践例2 「わくわくランド」へ招待しよう（中学部2年生）

模擬店や体験コーナーで構成した「わくわくランド」に小学部の児童を招待する単元です。グループリーダーを中心に、それぞれが自分の役割を果たし、グループの一員としての意識をもって取り組むことができるようにしました。お客さんに喜んでもらう経験から、進んで手伝おうとする姿や何かをしてあげようとする姿が見られるようになりました。

単元の構成（全23時間）

